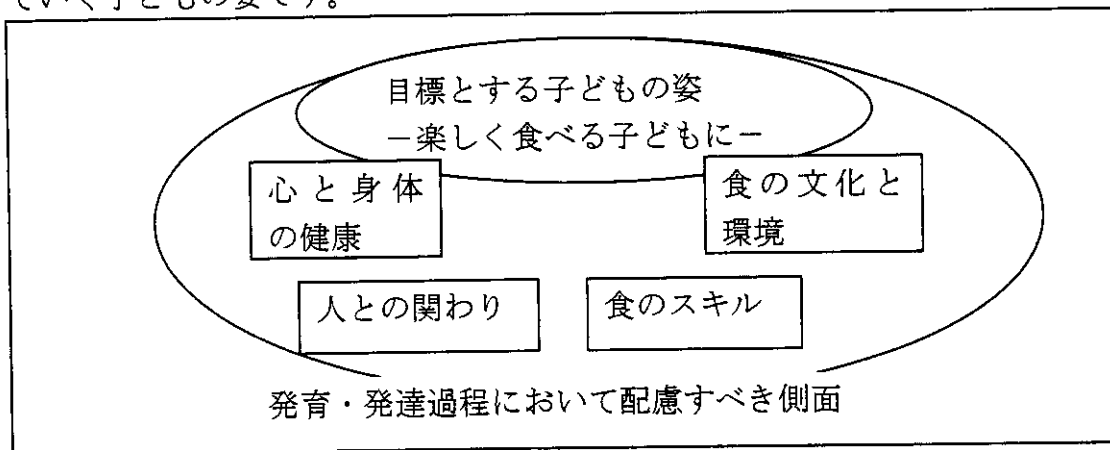


3 食を通じた子どもの健全育成からみた発育・発達過程に関わる

特徴

食を通じた子どもの健全育成の観点からは、食行動の発達だけではなく、身体的・精神的・社会的発達を含め、子どもを統合的にとらえていくことが必要となります。また、授乳期から思春期にかけて、それらがどう変化していくのか、子どもの成長を見通して、その特徴を踏まえた食に関する取組を進めていくことが求められます。

目標とする「楽しく食べる子ども」とは、下図のように、心と身体の健康を保ち、人との関わりを通して社会的健康を培いながら、食の文化と環境との関わりの中で、いきいきとした生活を送るために必要な食のスキルを身につけていく子どもの姿です。



したがって、発育・発達過程における特徴については、さまざまな側面から多くの要素があげられますが、ここでは、「食を営む力」を育てるために、特に配慮すべき側面として、「心と身体の健康」「人との関わり」「食のスキル」「食の文化と環境」に注目しました。それぞれの側面における発育・発達過程に関わる主な特徴についてまとめたのが、表1です。乳児期（授乳期・離乳期）から思春期にかけて、その特徴がわかるように示していますが、その一つひとつの内容や位置関係は確定的なものではなく、あくまでも目安の1つとなるものです。特に、学童期と思春期については、身長発育速度が最大になる時期が早くなっていること、その個人差も大きいことなどから、その区分を明確にすることは困難です。このため表1では学童期を括弧で示しています。

1) 心と身体の健康

子どもの発育・発達過程において、心と身体の健康な状態を確保することは基本です。

乳児期には、身体発育や視覚、聴覚などの感覚機能の発達が著しく、脳・神

経系の急速な発達が見られます。これらの発達は、周りの大人とのあたたかく豊かな相互応答的な関係の中で順調に促され、その中で安心感・基本的信頼感を育んでいきます。

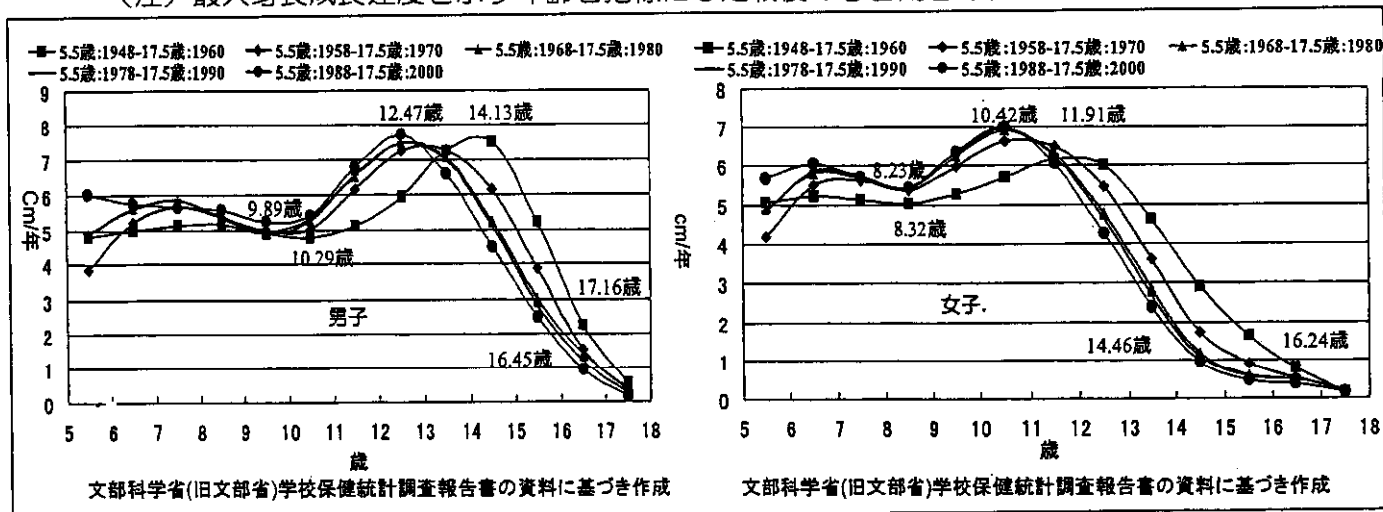
生命を維持し、生活の安定を図るためには、一人ひとりの子どもの生活のリズムを重視して、食欲などの生理的欲求を満たすことが重要になります。また、離乳完了期頃には、午後の睡眠が1回程度となり、睡眠、食事、遊びなど活動にメリハリが出てきます。この時期に、十分に遊び、1日3回の食事と間食（2回程度）を規則的にする環境を整えることで、おなかのすくリズムを経験することができ、それを繰り返していくことで生活リズムが形成されていきます。

乳児期から幼児期にかけては、さまざまな食物を味わうことによって味覚や、咀嚼機能が発達します。また、歩き始め、言葉を話すようになり、周囲の事物に対する好奇心が強くなっていきます。

思春期には、身長発育速度が最大となり、生殖機能の発達もみられ、精神的な不安・動揺が起こりやすい時期です。特に、身長成長速度が最大となる年齢について、ここ40年の推移をみてみると、男女ともに若年齢化の傾向にあり、成長促進現象発来年齢（思春期の開始年齢）は男子で9.89歳、女子で8.23歳となっています（下記（注）参照）。学童期の後半は思春期に該当することになります。

特に、心の健康のためには、安心感・信頼感のもとに、できることを増やし、達成感・満足感を味わいながら、自分への自信を高めていくことが重要となります。

（注）最大身長成長速度を示す年齢を指標にした戦後の思春期若年化



2) 人との関わり

子どもの発達は子どもと環境との相互作用を通して進むのであり、環境の中でも最も重要なのが、「人との関わり」です。

人との関わりによって、安心感や信頼感が育まれ、それによって関係性が拡大・深化していきます。親子、兄弟姉妹といった家族関係から、信頼できる大

人を仲立ちとして少しずつ仲間関係が広がっていきます。学童期以降は、仲間意識がだんだん強くなり、親しい友人が重要な存在になっていきます。さらに人との関わりは、社会との関わりへと発展していきます。

3) 食のスキル

「食のスキル」は、食を営むのに必要な能力のことです。それは食べ方や食事づくりの技術だけではなく、食情報への対処のしかた、自分にあった適切な食物の選択、一緒に食べる人への気遣いなど、食事全体を構想し、実践できる力のことです。

授乳期には哺乳によって必要な栄養量を確保し、離乳期には、離乳食を通して舌や歯茎で食べるなど咀嚼機能の発達を促しながら、固形食へと移行していきます。また、手づかみで食べることによって、手指と口の動きの協調運動を獲得して、スプーンやフォーク、箸など食具を使って食べることへと進んでいきます。周りの大人の食べ方も見て、模倣していきます。

授乳期には、空腹感を“泣く”ことで表出し、飲みたいだけ飲んで空腹感を満たします。これが食欲を育む原点となります。離乳期や幼児期においても、用意された食事の中から、自分で食べる量を確認し調節していくことで、空腹感を満たす量やその心地よさを体感していきます。

学童期以降は、さまざまな学習を通して、栄養バランスや食材から調理、食卓までのプロセスなど食に関する幅広い知識を習得し、理解を深めていきます。自分の周りに数多く存在する食物や食情報から、自分にふさわしいものを自分で選んで生活していくことが必要になってきます。

4) 食の文化と環境

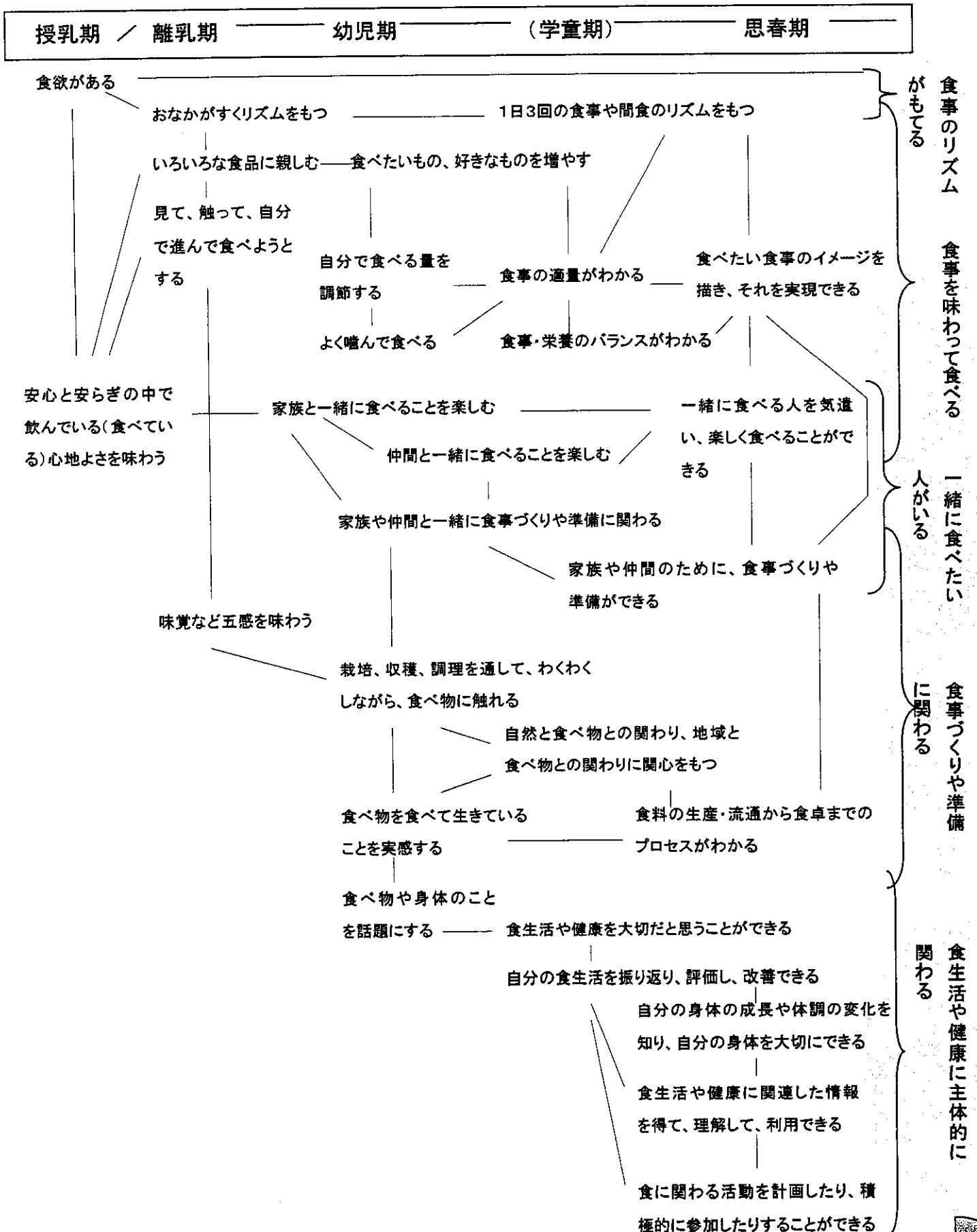
食物は、自然の中で生育した生物を収穫し、より食べやすく、おいしく、使いやすく、保存しやすいように加工して流通され、調理され、食事として整えられ、食べられています。「自然・地域」、「生物」、「食物」、「人間」、これらの広く深い関わりが、「食の文化と環境」です。

咀嚼機能や手指の運動機能が発達し大人の介助がなくても一人で食べられるようになると、食事にあった食べ方や食具の使い方を身につけながら、人と気持ちよく食事をするためのマナーを獲得していきます。

また、食物が自然の中で生育してきたものであることを知り、食物がどこで作られ、どのように加工され、店頭に並び、食卓にのぼるのかということにも関心をもち、理解していきます。そうして、生産物や食文化への関心も、自分が生活している身近な地域から、他の地域や外国へと広がっていきます。

生活や行動の範囲が拡大し、そこで出会う食物や食情報も広がっていくとともに、関心のある食物や情報を自ら収集・利用したり、それを誰かに伝えたりと、その関わりも積極化していきます。

表2 発育・発達過程に応じて育てたい“食べる力”について



がもてる
食事のリズム
食事を味わって食べる
一緒に食べたい
食生活や健康に主体的に関わる
食生活や健康に主体的に関わる



楽しく食べる子どもに

4 発育・発達過程に応じて育てたい“食べる力”

子どもは、発育・発達過程にあり、授乳期から毎日「食」に関わっています。「食を営む力」を育むために、表1の発育・発達過程に関わる主な特徴に応じて、具体的にどのような“食べる力”を育ていけばよいのか、表2にまとめました。

「食事のリズムがもてる」「食事を味わって食べる」「一緒に食べたい人がいる」「食事づくりや準備に関わる」「食生活や健康に主体的に関わる」子どもの姿を目標として、具体的な内容がわかるように示していますが、ここで示した一つひとつの内容や位置関係は確定的なものではなく、あくまでも1つの目安となるものです。また、一つひとつの“食べる力”は、他の“食べる力”と関連しながら育まれていくものです。関連性を示すためにいくつかが線で結ばれていますが、現実にはもっと多くの線が複雑に引かれるはずであり、さまざまな“食べる力”が重なり合って「食を営む力」を形成していきます。

1) 授乳期・離乳期

授乳期・離乳期には、安心と安らぎの中で母乳（ミルク）を飲み、離乳食を食べる経験を通して、食欲や食べる意欲という一生を通じての食べることの基礎を作ります。

授乳期には、母乳（ミルク）を、優しい声かけと温もりを通してゆったりと飲むことで、心の安定がもたらされ、食欲が育まれていきます。

離乳期には、離乳食を通して、少しずつ食べ物に親しみながら、咀嚼と嚥下を体験していきます。おいしく食べた満足感に共感することで、食べる意欲が育まれていきます。離乳期も後期になると、自分でつかんで食べたいという意欲が芽生え、手づかみで食べ始めます。「手づかみ食べ」は、食べ物を目で確かめて、物をつかんで、口まで運び、口に入れるという行動の発達です。それを繰り返すうちに、スプーンや食器にも関心をもちはじめます。いろいろな食べ物を見る、触る、味わう体験を通して、自分で進んで食べようとする力を育てていきます。

授乳期・離乳期—安心と安らぎの中で食べる意欲の基礎づくり—

- 安心と安らぎの中で母乳（ミルク）を飲む心地よさを味わう
- いろいろな食べ物を見て、触って、味わって、自分で進んで食べようとする

2) 幼児

幼児期には、睡眠、食事、遊びといった活動にメリハリが出てくるので、一生を通じての食事リズムの基礎を作る重要な時期になります。また、活動範囲が少しずつ広がり、好奇心も強くなってくるので、食への興味や関心をもてるように、食べる意欲を大切に、食の体験を広げていきます。

「おなかがすいた」感覚をもつには、十分に遊び、食事を規則的にとることのできる生活環境が必要です。この時期にこの感覚を繰り返し体験することで、生活リズムが作られていきます。

また、この時期には食べ慣れないものや嫌いものも出てきます。簡単な調理を手伝ったり、栽培や収穫に関わったりするなど、さまざまな食べ物に子ども自身が意欲的に関わる体験を通して、子どもの食べたいもの、好きなものは増えていきます。また、食べる量は、その日の活動量によっても異なるので、十分に遊ぶなど充実した生活を送り、用意された食事の中から、子ども自身が食べる量を加減して食べてみることで、ちょうどよい量がわかるようになります。

家族や仲間と一緒に食べる楽しさを味わうことは、身近な人との基本的信頼感を確認していくことになります。安心感や信頼感は、子どもが体験を広げていく基盤になるものです。

栽培、収穫、調理を通して身近な食材に触れることは、食べ物が自然の恵みからできた生物であることを実感することになり、行事食や郷土食を取り入れることは、食文化にふれることになり、食べ物への関心は広がっていきます。料理づくりには、味、色、香り、音など、子どもの好奇心を刺激する発見や驚きがあります。

さらに、買い物や食事場面で食材や食べ方について話題にしたり、遊んだり、本を見たりする場面でも、食べ物や身体のことを話題にしたりする体験を通して、子ども自身が情報の発信者になることもでき、食べ物への関心は深まっていきます。

幼児期—食べる意欲を大切に、食の体験を広げよう—

- おなかがすくりズムがもてる
- 食べたいもの、好きなものが増える
- 家族や仲間と一緒に食べる楽しさを味わう
- 身近な食材に触れて、料理づくりを楽しむ
- 食べ物や身体のことを話題にする

3) 学童期～思春期

学童期、思春期には、さまざまな学習を通して、栄養バランスや食料の生産・流通から食卓までのプロセスなど、食に関する幅広い知識を習得していきます。健康や福祉、環境問題や国際理解など、多くの課題との関連のなかで、食の広がりについて学んでいきます。

学童期には、食べてみたい、作ってみたい、もっと知りたい、そして誰かに伝えたいといったように、食への興味や関心が深まるよう、家族や仲間との関わりの中で、地域や暮らしとのつながりの中で、自分が理解したことを積極的に試して、そこから実感する楽しさを通して、食の世界を広げていきます。

さらに、思春期には、習得した知識を応用して積極的に実践し、評価することから得られる楽しさや、社会の一員として人のために役立つ活動から得られる楽しさなどを通して、自分の健康、周りの人との関わり、食の文化や環境との関わりの中で、自分らしい食生活の実現を図れるようにします。

また、この時期には、肥満ややせといった将来の健康に影響を及ぼすような健康課題も生じてきますので、自分の食生活を振り返り、評価し、改善できる力や、自分の身体の成長や体調の変化を知り自分の身体を大切にできる力を育みます。

学童期—食の体験を深め、食の世界を広げよう—

- 1日3回の食事や間食のリズムがもてる
- 食事のバランスや適量がわかる
- 家族や仲間と一緒に食事づくりや準備を楽しむ
- 自然と食べ物との関わり、地域と食べ物との関わりに関心をもつ
- 自分の食生活を振り返り、評価し、改善できる

思春期—広い食の世界のなかで、自分らしい食生活を実現しよう—

- 食べたい食事のイメージを描き、それを実現できる
- 一緒に食べる人を気遣い、楽しく食べることができる
- 食料の生産・流通から食卓までのプロセスがわかる
- 自分の身体の成長や体調の変化を知り、自分の身体を大切にできる
- 食に関わる活動を計画したり、積極的に参加したりすることができる

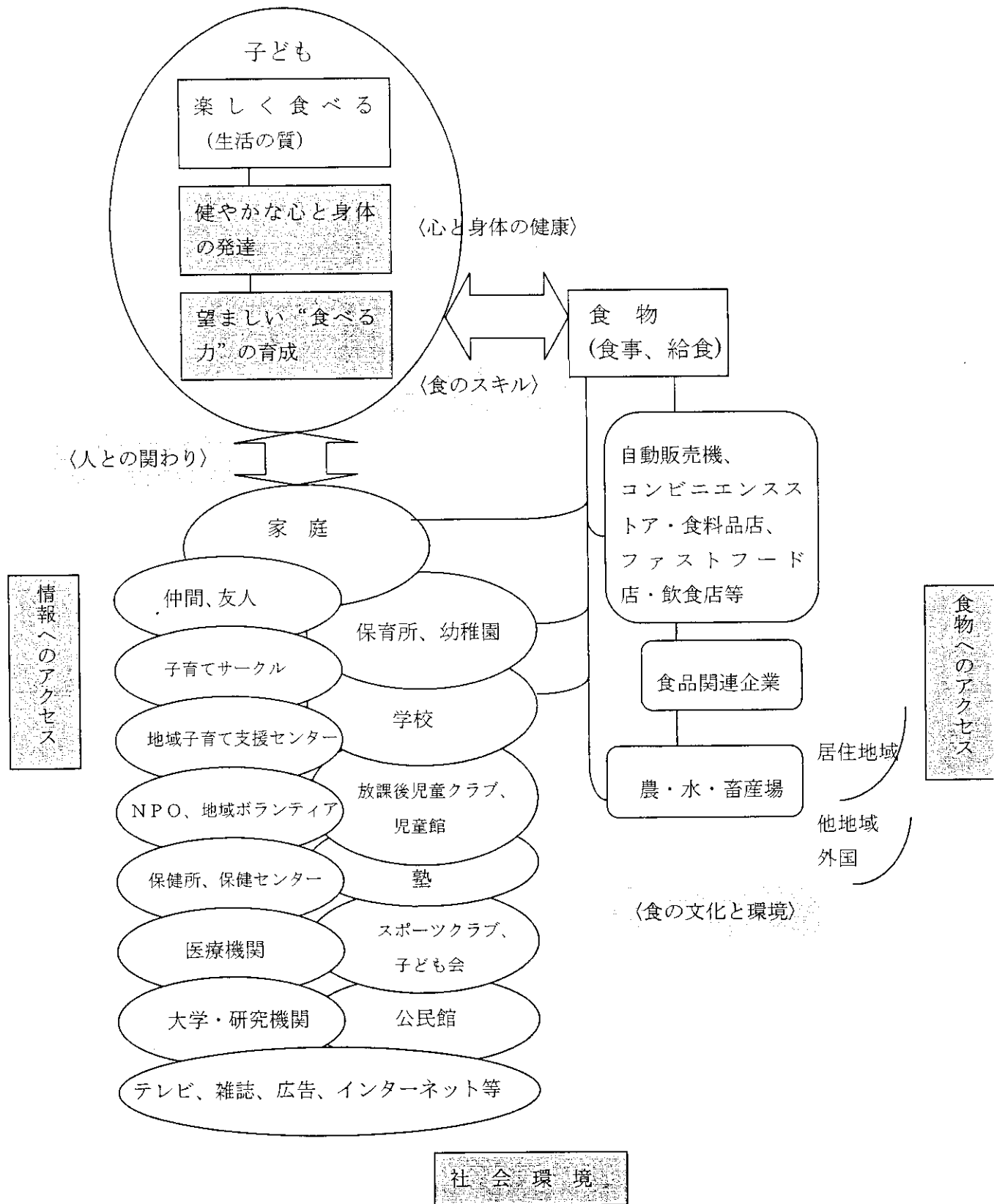


図1 食を通じた子どもの健全育成のための環境づくりの推進

5 “食べる力”を育むための環境づくり

1) “食べる力”を育むための環境づくりの必要性

子どもが成長していく過程で、子どもの食に関わる人々や関係機関・団体は数多く存在します。子どもの“食べる力”を育てていくためには、その発達を支援していく環境づくりが必要です（図1）。

すでに、保育所、学校、保健機関など地域で、子どもの食についてはさまざまな取組がなされています。食は広がりのある分野ですから、さまざまな取組が、重なり合い、補い合うことによって、その広い食の世界を子どもが体験し、食への興味・関心を高めることができます。

しかしながら、特定の人々、特定の機関だけが取り組んでも、すべての子どもに豊かな食体験の場を提供することはできません。継続的に、より広がりのもった活動として進めていくためには、地域の中で連携を図って進めていくことが求められます。

連携を進めていく上では、関係機関において、それぞれどういう特徴をもった取組が進められているかを知り、お互いの活動を尊重しあい、さらに活動を深めていくことが重要です。

また、子どもにおいては、発育・発達の過程にありますから、「食べる」という体験を繰り返しながら、食に関する「情報」を得ていくことが必要となります。図1には、「食を通じた子どもの健全育成のための環境づくりの推進」ということで、食物へのアクセス、情報へのアクセスの大きく2つの流れを示しています。家庭、保育所、学校などは、日々の「食事（給食）」を通して、「食物」と「情報」の両者の提供が進められる貴重な場ということになります。また、子どもの食べる力を育む上で最も関わりの大きい「家庭」については、子育てサークルや地域子育て支援センターなどさまざまな場において「情報」の交換が進み、保育所や保健センターなどからも役立つ「情報」が得られるなど、地域が家庭を支援していく仕組みづくりも必要となってきます。

一人ひとりの子どもが、広がりのある食の世界と関わり、そして人との関わりを通して、食べる力を育み、健やかな心と身体を育てていくことができるように、社会全体で取り組んでいくことが求められています。

〈参考資料〉

- 1) 村田光範：教育講演 10「小児期・思春期の肥満症」，肥満研究，vol. 18 (supplement) P. 59 (2002)
- 2) 渡辺久子（主任研究者）：平成 14 年度厚生労働科学研究（子ども家庭総合研究）「思春期やせ症の実態把握及び対策に関する研究」
- 3) (財) 日本学校保健会：「平成 12 年度児童生徒の健康状態サーベランス事業報告書」
- 4) 日本体育・学校保健センター「児童生徒の食生活等実態調査」（平成 7 年、12 年）
- 5) 文部科学省：「児童・生徒の学校外学習活動に関する実態調査」（昭和 51 年、60 年）、「学習塾等に関する実態調査」（平成 5 年）
- 6) 厚生労働省：「児童環境調査」（昭和 61 年、平成 3 年、8 年、13 年）
- 7) 厚生労働省：「平成 5 年国民栄養調査」
- 8) (社) 日本小児保健協会：「平成 12 年度幼児健康度調査」
- 9) 厚生労働省：「平成 7 年度乳幼児栄養調査」
- 10) 日本体育・学校保健センター：「児童生徒の食生活等実態調査」（平成 7 年、12 年）
- 11) 足立己幸（主任研究者）：平成 14 年度児童環境づくり等総合研究事業報告書「地域で支える児童参加型食育プログラムの開発に関する報告書」p. 7-17